梨園

俳優の事。芝居をする役者の事。

唐の玄宗といふ王は音樂や舞踊がすきであつたので、三百人を選んで梨園といふ處で自ら教へられた。歌ふ歌を聞き、誤りがあると天子はそれを一つ〳〵直された。これを當時の人は「皇帝梨園の弟子」といつた。〔唐書〕

李下に冠を正さず

他人から疑ひを受けるやうな行爲をしない事。

齊の威王の姫の虞といふ人の言つたことに。「瓜のなつてゐる畑では靴を穿きかへない、李の木の下では頭の冠がまがつてゐても正しくしない」とある。即ち冠を正すときは手を上にあげるから、李の實を盜みとるかと疑はれるためである。「瓜田に履を入れず」を見よ。〔列女傳〕

犂牛の喩

親に惡い點があつても、その子が賢ければ必ず用ひられるといふこと。

「犂牛」は「まだらな牛」で、犂牛のやうなつまらぬ者の子である仲弓といふ人は、毛色が赤くして角の形が正しいならば神に供へる牛として捨てられる事はなく用ひられるやうに、仲弓も重く用ひられる事があるとある。〔論語〕

六軍

支那で天子の軍をいつた。我が國でも用ひる。

一軍は一萬二千五百人で、支那の周の時代には天子は六軍、大名の中で大は三軍、中は二軍、小は一軍と定められてあつた。〔周禮〕

六韜三略

六韜は太公望呂尙の編んだ兵書で、三略は黄石公の撰んだものといふ。一般には奇計の出て來る據りどころの意に用ひる。

「韜」は「つゝみかくす」といふ意味で文韜、武韜、龍韜、虎韜、豹韜、犬韜の六つを呂尙といふ支那の兵法家が撰んだといふ。三略は上中下の三卷から成る黄石公の兵書で、「略」とは謀の意味である。

履霜の戒

禍の來る前に注意すること。

霜がふると間もなく嚴寒が來るのは定つたことであるから、霜の降つた時に早くも多の寒さを思つて用心すること。〔左傳〕

離朱の明

目のよく見えること。

離婁といふ人は目が良く正確であつた。他の者は定規をあてなければ出來ないやうなことでも正しく四角形を畫く事が出來たといふ。〔孟子〕 愼子といふ本には「離婁の目ならば百歩の先でもどんな小さなものも見ることが出來るが、水の流れが急であれば一尺の深さの底にあるものも見られない。これは水勢が急で見分けられぬからである」とたとへてゐる。

利に依りて行へば怨多し

自分の利になるやうにすれば人から怨まれる。孔子の言葉で、利益は誰も望むものであるから、自分獨りが取つてゐると人は害を蒙るので怨まれるやうになり、結局自分の利も長く保つてゐられないといふ意から出た。〔論語〕

龍頭蛇尾

始は盛大で終りは縮小する事。
龍のやうな頭で蛇のやうな尾。
〔五燈會元〕

良(リヤウ)禽は木を擇ぶ

賢人は賢明なる主人に事へること。
良い鳥は木を選んでとまるやうに賢臣も良い主人に事へると喩へたので、孔子の語である。

良(リヤウ)賈は深く藏めて虛しきが若(ごと)くす

君子たるものは自分の德をかくして、凡人のやうにすること。謙遜の德である。
「賈」は商人で、良き商人は商品を藏に入れて店頭に出さぬので少しもない樣に見える。汝も驕慢や欲望や野心等は不要なりと戒めた。〔史記〕

梁(リヤウ)上の君子

盜人のこと。
陳寔の家に盜賊が入り梁の上にかくれてゐるのを見つけたので、之を誡めていふのに、「不善の人でも皆生れながら惡人と

は限らぬ。習慣となりこんな事をしたのだ。即ち梁上の君子といふべきだ」と。賊は驚いて降り、頭をすりつけ謝した。陳寔は、「その樣子を見るに心からの惡人ではない、家が困つた爲めであらう」といつて、絹二匹を與へた。これからその縣内には盜賊がなくなつた。彼の死するや會葬して香を供へる者三萬人、喪服を着て葬式に參列するもの數百人。文範先生といはれた。〔後漢書〕

陵夷

次第に衰へすたれること。
「陵」は丘、「夷」は平地で、丘が次第に平地になることからたとへた。

龍駒鳳雛

神童のこと。
陸雲は六才の時に文を書いた。兄の陸機と同じやうに賞せられたが文章は兄に及ばなくとも見識は兄以上であつたので、世の人は二陸といつた。幼少の時に関鴻が不思議な兒として、「此の子は龍駒でなければ鳳雛だ」とほめた。鳳は「おほとり」〔晉書〕

陵谷の變

世の移り變りのこと。
晉の杜預は後世まで名の傳はるやうにと願ひ、「高岸は谷となり深谷は丘となる」ので、二つの石に自分の勳功を刻んで、一つは山の下に埋め、一つは山の上に建てた。〔晉書〕

燎(かゞり)原の火

悪いことはすぐに進みやすいこと。

「燎」は燒くことで、悪いことは火が野をやくやうに盛なもので、どうとも手がつけられない。〔左傳〕

陵遲

㊀丘の坂道が次第にゆるやかになること

㊁物事の次第に衰へてゆくこと。

空車でも三尺の岸は登る事は出來ぬ。百仞の山は荷物をのせた車を登せられる。それは陵遲であるからだ。〔荀子〕

遼(かゞり)東の豕

他人から見ればつまらない事を自分の見識が狹いので自己の功をほこること。

漁陽の長官であつた彭寵は自分の功を自慢してゐたが、それをきいて幽州の朱浮が手紙を送つていふのに、「君は自分の功は天下第一であると一人で思つてゐるやうだ。しかし、かういふ話がある。昔遼東に豕(豚の類)があつた。これが生んだ子は、頭が白かつたので珍らしいと思ひ、君主に献上しようと持つて河東まで來ると、その邊にゐた澤山の豕は皆白かつた。大いに恥ぢて歸つたといふ事だ。若し君がその功を朝廷に報告して賞を賜はらう等とするなら、この豕と同じだ」と。〔後漢書〕

龍頭鷁首

天子の御座船のこと。

屋形船二隻で一對となるが、一雙の軸に

は龍の頭の形を彫刻したものをつける。これは龍の水中を走るのになぞらへたもの。他の船は鷁(鳥の名)の首の形を彫刻したものをつける。これは風に堪へるからといふ。

綸言汗の如し

天子の言は一度出でると變ることなしの意。

一度口より出でると汗のやうにかへることはない。〔文心雕龍〕

【る】

累卵の危

卵をかさねたやうに非常に危いこと。

史記の中に、「秦は累卵のやうに危し」といふ意味があつて、國や家やその他いろ〳〵の場合にたとへて用ひる。

累々として喪家の狗の如し

家に不幸のあつた時はその家の人は哀悼の心のために犬に食物をやることも忘れ勝ちであるから犬は、累々(志を得ないこと)としてしまふ。宋の桓魋が木を切り倒して孔子をつぶして殺さうとしたので孔子は鄭に逃れた。鄭の人は孔子のことを、「東の門の下に異樣な人がゐて、その額の樣は堯帝(古の名君)に似てゐる。襟元は皐陶(舜帝に用ひられて司法大臣となる)に似、肩は子産(鄭の國の偉い家老)に似てゐる。腰から下は禹に比べると三寸ひくい。その樣はいかにも疲れはてゝ喪家の狗のやうだ」と評判した。

【れ】

蠡を以て海を測る

見るところの狹いことをいふ。漢書にある句で、「蠡」は瓢でふくべ、ひさごのこと。これで大海を測ることは出來ない。

囹圄

牢獄のこと。

風俗通に、「夏の時代には夏臺といひ、殷の時代には羑里といひ、周の時代には囹圄といつた」とある、「レイギョ」と讀むのが正しい。

「囹圄空し」とか「囹圄草生ず」等の句もあつて、何れも罪を犯す者のない事をいつたのである。

令兄

自分の兄をいふのであるが、後には他人の兄のことをいふやうになつた。

詩經にある語で、「此の令兄弟は綽々（ゆつたりとしてせまらないこと）として餘裕あり」と。「令」は善しといふ意味。

伶人

音樂を奏する者のこと。

黄帝の代に伶倫といふ者が音樂を作つたので、樂官を伶官といつた。〔左傳〕

令弟

自分の弟のこと。後には人の弟のことをいふ。

「令兄」を見よ。（一九八頁）

輦轂

天子の御乘車。

「輦」は手で持つて運ぶ車、「轂」はこしき。兩方とも天子の乘用せられる車。その車のある地を「輦轂の下」といふ。即ち首府。

連城の璧

「和氏の璧」を見よ。（一九頁）

蓮府

大臣の家のこと。

晉の宰相の王儉は蓮の清らかなるを好んで、自分の邸内の池に植ゑて賞したところから言つた。

連理の枝

夫婦のちぎり。又は愛情厚い男女の事。「連理の契」ともいふ。

宋の家老の憑といふ者の妻は美人であつた。康王はその美に動かされ奪つたので憑は王を怨んだ。そこで王は憑をつかまへて投獄したので、憑は自殺してしまつた。或る時、妻は王に連れられ宵陵臺に登つたが、夫の事が忘れられぬ妻は王のすきを見て臺上から身を躍らし死んだ。王は怒つて埋めたが、この夫婦の墓は對ひ合つてゐた。そこに木が生えると、根も交り合ひ、枝も連つてゐたといふ。

〔搜神記〕

「理」はもくめ。白樂天は「長恨歌」の中に「天に在つては願はくは比翼の鳥と

なり、地に在つては願はくは連理の枝とならん」と歌つた。

【ろ】

隴を得て蜀を望む

その上〳〵と慾張ること。常に満足しないで何か得ようとすること。

東漢の光武帝は隗囂のたてこもつてゐた隴山の東の隴右を平定した。帝は或時嘆じていふには。「人は常に自ら満足してゐる事が出來ないのでいろ〳〵と心に苦痛がなくならないのだ。そこで隴右を得たから今度は蜀の地がほしくなつた」と。大將軍の吳漢をやつて公孫述の據る蜀を征め成都に攻め入つて平定した。〔後漢書〕

老牛舐犢

親が自分の子供を愛すること。

後漢の楊彪は曹操に子の脩を殺された。或る時操は彪を見て、「君はやせたがどうしたのか」ときくと、「前漢の時代に金日磾といふものに二人の子供があつたが、武帝に愛されて近侍となつた。然るに二人の子は帝に寵愛されてゐるのをよい事として女官とみだりがましい事をしたので、磾は前途を心配して殺したといふが自分には子供の將來を見拔く力がなく、たゞあなたに殺されたのをいとほしく思ふばかりだ。老牛が子牛を舐るやうな子に對する愛情ばかりだ」といつたので操も大いに同情した。

老驥伏櫪

英雄は年老いても、尙、大きな志のあること。

「老驥伏櫪」ともいふ。魏の武帝の詩にある語で、「櫪」は厩のねだのこと。

弄瓦の喜

女の兒を生んだよろこびのこと。

詩經にある語で、「女子を生めば瓦を弄ばせる」とある。「瓦」はいとまきの事で、これには孔があつて、女子は大きくなつたら着物を縫はねばならぬので、幼い時から針に糸を通すことをならはせるためである。

臘月

陰曆の十二月のこと。

「臘祭」を行ふ月であるから稱したので多至の後、三度目の戌の日に多くの神を祭ることを漢の時代に「臘祭」といふ。

「臘」は「獵」で狩をして獸をとつて來て先祖を祭る處から出たのである。〔說文〕

弄璋の喜

男子を生んだよろこびのこと。

詩經にある語で「男子を産めば璋を弄ばせる」とある「璋」は禮式の時に飾として用ひる玉を半分にしたもので、男子にとつてはこの玉のやうに德が大切である事を幼少の時から自然に知らせるため

に之を與へて玩具とする。

狼(ろう)藉(ぜき)

㈠亂雜なこと。
㈡亂暴なこと。
狼は草を藉いてねるが、そのあとは草が切れ亂れるところから、すべてものゝ散亂する樣のことを譬へた。〔通鑑演義〕

壟斷(ろうだん)

獨り占めすること。利益を獨占する事。
また、元來は岡が斷ち切られたやうに高い處といふこと。高い岡の上に登つて市中の樣子を眺めて町の利益を網ですくふやうに一人でとつてしまふといふ處から出來た。〔孟子〕

廊(ろう)廟(びょう)の器(うつわ)

政治家となる才能のある者のこと。
「廊廟」は表御殿で、許靖といふ者をほめて「朝廷にあつて政治を行ふ才」といつた。〔三國志〕

魯魚(ろぎょ)の謬(あやまり)

字の寫しあやまりのこと。
張騫の話に「亥(ゐ)と豕(ゐのこ)と涇(川の名。この川の水は濁つてゐるといふ)と、渭(川の名。この川は澄んだ水といふ)とあやまる。魯(おろか)と魚と、淄(黑い色)と澠(川の名)とは區別し難いのでよく書きあやまる」「涇渭分る」とは濁と清との、はつきりしてゐることにたとへて用ふ。

鹿(ろく)鳴(めい)の宴(えん)

㈠地方の人で中央政府の役人となる資格試驗に合格した者を、その地方の長官が招いて開く宴のこと。
㈡貴賓をもてなす宴會のこと。
この宴の時に詩經にある「鹿は和やかに鳴いて、野原の草を食べてゐる。今、自分のもとに貴賓が來てゐられる。琴を奏してたのしむ。又よい酒があつて客人をもてなす」といふ「鹿鳴の詩」をうたふ處からいふ。その家を「鹿鳴館」といふ。

盧(ろ)生(せい)の夢(ゆめ)

「一炊の夢」を見よ。(五頁)

魯般(ろはん)の巧(たくみ)

戰爭の上手なこと。
楚は宋を攻めようとした。墨子はこれをきゝ心配して楚王を訪れて、「君は義を破つて戰つても宋を降伏させることは出來ないでせう」と。王は「魯般といふ戰爭に上手なものがゐる。いかに宋の城が堅固でも彼に雲梯を作らせて攻めたならばとれないことはない」と。墨子は「それなら私は宋を守る方法を考へます」といつて宋に行き守備を嚴重にして戰つた。般はいろいろ手段をかへて九度攻めよせたが墨子は之に應じて守ること九度、遂に楚の軍を退けて攻め入らせなかつた。般は戰の方法は盡きたが、墨は守る方法はまだ十分あつた。〔淮南子〕
墨子は名を翟と言つたので、「墨翟の守」ともいふ。又、魯般は斑輸といつたので

「斑槍の雲梯」ともいふ。

鹵簿

天子の行列。

「鹵」は大きい楯で武器。天子の外出にはその武器を持ち甲冑（よろひとかぶと）を着けた者が前後に従ふ。その順を帳簿に記すところからいつた。〔漢官儀〕

鹵莽滅裂

事をするのに粗略で心をよく入れないこと。たゞ「鹵莽」ともいふ。

「鹵」は草や木が生えなく荒れた土地のこと。「莽」は雑草の生えた土地「鹵莽」も「滅裂」も粗略にすること。「政治をする時には鹵莽にしてはならない。民を治めるのに滅裂にしてはならない。自分は費、稲を作つたが田を耕して粗略にすると結果は收穫も少い。草を刈つて種をまいても滅裂にすると實はとれない。次の年はよく耕し、よく土をならしたところが米は澤山とれて、生涯無事に食物に困らなかつた」と長梧の封人（封域を掌る役）が子牢に言つた。〔莊子〕

【わ】

我が彀中に入る

弓を射て獲物がとれたこと。自分の計畫通りになつて手に入つたこと。

唐の太宗は、世が太平のため地方の英雄が自分の手腕を振ふ機會がない事から不平を持たせないやうにしようと、役人を採用する試驗の制度を設けて一生懸命に

勉強させ、不平をいふ暇のないやうにした。或る時、端門（御殿の名）に行くと受驗生が出入してゐるのを見て「英雄我が彀中に入つた」といはれたが、之は太宗の計畫があたつて英雄を手中におさめた意味を言はれたのである。不平をいふのは閑人にあり勝ちである事は今の世も同じやうである。「彀」とは矢をつがへて弓を引きしぼること。〔撫言〕

和光同塵

㈠才德をかくして一般の人と一緒にゐること。

㈡偉い人が俗人の中にゐること。

老子の中にある語で、「和光」とは、光を和げてかくすことで、「同塵」は、塵のやうな中にまじること。「塵」とはこの世のことをいふ。

殃池魚に及ぶ

禍が他のものにまで及ぶこと。そば杖をくふこと。

「池魚の殃」を見よ。（一〇一頁）

禍は常に蕭牆の中にあり

禍や心配事は却つて常に内にあつて外にあるものではない。

「蕭牆の憂」ともいふ。

魯の家老季孫は顓臾を討ち取らうとした孫の家臣冉有、季路の二人は孔子の門人であつたので孔子の家に行つて討伐の善いか惡いかを相談した。孔子は反對したが、冉有は「顓臾は守備を堅固にし、又季孫の都の費といふ處に近いから今のう

ち攻め取らないと、後になつては季孫の子孫のために心配を殘すことになる」と贊同を求めた。孔子は、「大名や家老にとつて、小國であることや貧乏な事は少しも心配にはならないものだ。心配のたねは人民がその身分に安んじ政治がよく行はれてゐるかどうかといふ事だ。國内が良く治まれば遠方の人も自らなついて來る。顓臾も自然に德化を慕つて來るやうになる。今、國内を治めずに討たうといふのは不心得のことだ。季孫の心配は顓臾ではなくて國内で變革が起りはしないかといふことだ」と。「蕭牆」は「垣」垣の内といふことから、家の内、國の内といふ意。〔論語〕

禍は口より生ず

言葉をつゝしまねばならないといふ意。釋氏要覽に、「禍は口より生ず、口舌は身を切るの斧なり」とある。

笑の中に刀を礪ぐ

表面は溫和に見えて内心には野心を抱くこと。

李義甫は外見は非常に穩かであつて人に話す時には笑ひよろこんで語つた。しかし、内心は許し難い計略をめぐらしてゐたことを記した語である、「笑中の刀」ともいふ。

我に身後の名あるも卽時一杯の酒に如かず

死んでから名譽を得るよりも、生前に酒を貰つた方がよいといふこと。死後の香

典などよりも、どうせ貰ふものなら、生前の方が有り難いといふこと。

張翰は氣まゝで勝手な事ばかりしてゐたが、或る人が「そんなに人にかまはず思ふまゝに振舞ふよりも、死後に良い評判をとるやうにしたらどうか」と言つたのに答へたのがこの句であつた。

昭和十三年七月十日印刷
昭和十三年七月十五日發行

著者檢印

桑文社

大衆の故事と熟語

定價 金八拾五錢

〔外地定價九拾五錢〕

編纂者　桑文社編輯部
發行者　東京市神田區錦町一ノ三錦ビル　天野要
印刷者　東京市小石川區白山御殿町六四　新妻乾

發行所　東京神田錦町一ノ三錦ビル　振替東京三五二二五番　桑文社
關東賣捌元　東京神田錦町一ノ一一　振替東京六〇一八三番　照林堂
關西賣捌元　大阪東區北久太郎町四　振替大阪二三一番　柳原書店

隨所に現れる辛辣な諷刺的批判と興味的解説こそ本書の生命である

高橋福雄著　四六判二百餘頁上製函入

趣味的解説　警句と名言

價一・二〇　送料一〇　代引送料二〇

機械の運轉に絶えず油が要るやうに人生も複雜になればなる程修養の油が必要である。本書はこの必要を滿すに充分な內容と高尙な裝幀を持て生れた絶好の趣味と修養の書で從來の陳腐な警句や俚諺の羅列集と異り何れも東西古今哲學的名警句、一字千金の名言即ち

▲慧知出でて大僞あり（老子）
▲百戰百勝は善の善なるものに非ず（孫子）
▲歡樂極まつて哀情多し（漢武帝）

等々一千言を收載し各句毎にその出典を明示し興味的解說を附し時に辛辣なる諷刺的批判を試みたる名著で當に現代知識人の要求する無二の處世の兵書である。

東京市神田區錦町一ノ三錦ビル　桑文社　振替東京三五二二五番　電話神田(25)二四二三番

渡部善彦著　四六判上製函入四六四頁　價一・五〇　送料十四　普通代引廿六

趣味常識 迷信と事物の由來

事物一つ一つの來歴！
讀んで始めてほるなるどと思ふ興味津々たる書

本書は吾々の實生活上に深い謎を與へてゐる丙午、鬼門、三隣亡等代表的迷信の由來及び社會各部門に亘る古今の興味的事物、例へば刺青、虚無僧、太陽暦、煙草、人柱、圍碁、將棋、人造絹糸、貨幣、拷問、割禮、貞操帶、サーカス、サンタクロース、三味線、新聞紙、人身賣買、相撲、女優、潜水艦、アパート等約三百五十項につきその起源と由來を物語的に解説せる得難き趣味と常識涵養の名著である。

東京市神田區錦町一ノ三錦ビルヂ　桑文社　振替東京三五二二(25)　電話神田二四三六番

戰爭謀略の解説書！
處世鍛練の指導書！

高橋福雄著　四六判上製　四百十余頁　價壹圓五拾錢　送料十四錢

士道至言

內外古今の戰術書、兵法書、修養書より含蓄ある名言名文壹千語を集錄し之を平易に興味深く解説せるもので戰略の眞理を明快に傳へ、士道の精髓を敎へ一面異變に遭遇して屈せざる心の態度を明示す、けだし戰時下必讀の書として江湖に薦む

圖書目錄進呈

項目拔萃

◆亂を以て治を攻むる者は亡び、逆を以て順を攻むる者は亡ぶ（戰國策、昭襄王）

◆男兒まさに邊野に死し、馬革を以て屍を裹み、還り葬らるべきを要むるのみ。（後漢書、馬援傳）

（目次大要）國粹美……忠君・愛國……戰爭・謀略……武將・士道　勇武・名譽……死生・天命……雜

東京市神田區錦町一ノ三錦ビルヂ　桑文社　振替東京三五二二(25)　電話神田二四三六番　東京神田三五二二　二二四三　五六番

渡部善彦著

語源解說 俗語と隱語

菊半截判
上製函入
價 八拾五錢
送料六錢

本書は花柳社會で使はれる言葉、泥棒やスリ仲間で使ふ隱語、逆語、相場師社會の術語その他田舍の方言、俗語、珍語、奇語、外來語、新造語、流行語例へば泡を食ふ、板間稼ぎ、一か八か、おふくろ、お茶を引く、岡目八目、土左衞門、上戸下戸、小便をする、半疊を入れる、十八番、案山子、夜なべ、兵子帶、半どん、どてら、出齒龜、傳法肌、源氏名、破鏡、てら錢、千秋樂、下馬評、金輪際、彌次馬、八百長、冷かし、鹿島立、牛太郎、市松模樣、花魁、梨園、萬引、猫婆、ドチ、刀自、畫餅、女形、三助、流石、左遷、左官、芝居、處女、贅六、手紙、饅頭、桑原、傾城、百姓等々約五百余語の起源を解說したるもので普通の國漢辭典には見當らない興味絶對の書である。

東京市神田區錦町一ノ三ルビ
桑文社
振替電話東京三二四二番
神田錦町三ノ二五番

終